燕石襍志

弓貳

一 古訝の詐
二 人口膾炙の訝
三 時代不同歌合
四 逃水
五 一二の橋
六 房錢
七 夕立
八 匂ひ花
附 折端
九 狂歌
附 大人先生
十 詩歌吉凶
附 五穀多寡
土 鬼神論

15
1493
2

45
1493
2

帝國圖書館藏
大學
35.2.1
購入
書

帝國圖書館藏

江戸

一 古歌の紙

新著聞集といふものの小説に張範盜賊のあとを高野山に登りとゞ
の跡を捉ゆ山坊こゝらにとゞまりて覺られば後世のたゝりをおそれ向
骨堂へ投入れをき一首詠をとゝめん

賣石山峯入歳へにしゆゑ
とゝのゝをを越こゝろこゝに捉るべし捉とる小室所敷拂給よ
普光院殿高野山へまうでゝ骨堂へ予も存命うゝ
ひとのこゝろにおもうゝをとゝめて御蓋を捉とゝめ人の内へ
とゝ

高野山ゆくと崇ゆゝとゞめこゝの元後の世ともこゝ

蓑笠軒 瀧澤馬琴

とん色槐門貴族の歌をかく緑林魁首のにぐさひとちびかとの
べ侍あやまちたるかこを　かく歌のかるる呂利ていとうしこの月の
るも善光院殿ありしとめり
○亦近曾印行せし續畸人傳といふものゆゑ佐川田喜六なるとゝ組を近
衛殿へこまりうく
ゆゝしきさとびかうさをぬく二ゝかゞ半の扇ゆゞたそもんをゝ
うゐも室所殿物語ゆゑ胃叱ゞ歌とうたいづれも見るゝ予ハ室所殿物語
の後ようらうあべくゆはもゝ
○亦倍ゆの生涯ゆ口号ゝとなる古言ゆゑ記かまゝ
ゆゝしきゞたるものを筵人のあとうちるゝゆ歌の記ゆ
ゝ江戸幕景集大田道灌が孤山集ゆ揚え朝臣短慮功をるのさゞと異黎の作り
言葉ゆゝとゝようゝとゝのゝ一ゆ書ゆゝゆゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]ことをかぎりとして定るものなれば
をしわかるべきは是不是花中偏愛菊此花開後更無花
いえ顧の秀句なるが身まりてそこの美人を憑こと後とかの字なり
らんど盡とあるべしとのひとうせしとどこのらの古今著聞集かえたり
本邦にも松の雪とのふ歌を編りねるに松雪と戒名はそたべとのひとく
身まりし女もありりきづこと歌の編ぞもあれぞめくに古今のりとも
紙らどを涌せこのあしとと甚しくそこの歌を合しとうとう
春の夜のそのいあやなし梅の花をもまるをもちる人どしる
とまこと顔よりそどることをとこと〜清いられたる古今集春の部
上の句い朗恒まちの夜の春のあやなし梅の義 下の句い友朗
琴を焼く鶴を烹このいあるこの女をいかべこん

○のみくいかに、こそあらねば古歌の翻書をとりたんとく秀歌のお意を失へるあり

安積山影副所見山井之浅心乎吾念莫国 万葉集 巻十六

この歌を古今序にの万葉の隨よ浮と葛城の王橘諸をこの外
ひとりる時よ國のはこのこのあるこのこのこのこのこのこのこのこ
うりるこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ
ゆまるこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ
このこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ
井のこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ
陸奥の山ぎさくこのこの山の井のあるこのこのこのこのこのこ
上のこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ
女のこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ

巻十 初按 摘要十 抑采 万葉集 抑采

インボン
温奔とこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこのこ

序よりの序ゞ實事まゝ大和物語よりもすゝ大女よりはれ衣
を被せるゝ采女なる女昊あゝくんまゝ大和物語の紀有を恨もべゝ
さべゝ俳り物語の善八を悪人よ俳りゝこゞ奥女をあゝ淫婦よゞ
ず懲悪勸善を正くまゝらを俳有の和意ともべゝ世ゞ古ゝ
ゝ俳ゝとゝあゝべ難ゝゝ欲
の歌の紙書を浮ゝ条情一トしほちゝもおゝりゝ在大将道綱の母君の
ゝびゝゝゝひゝりゝる疾のあゝる写いゝゝひゝゝのゝゝゝる
ゝゝの歌の紙書をゝゝゝ

たゝ花も散るの山鳥に歎くとなるこの句信言不美。美言不信。
老子ちくり夫禁雀は大鵬の志をたゝまと庸人は聖賢の言を通ぜず
歌も又たゝるべしゝ紀歌は世俗の耳小なえねぐるや生平なれ
和平連歌はくるゝぞ秀逸はあゝ一大歌は吠て群犬声を吠せ
たれもゝにはいそゞぐゝたれは打込集はえゝ竹人の流ぶとるを
ぎを絲ゝとゝ出るまゝゝは註を
うんのもうゝ月のも古器ゝゝ
根摸國新井流主三浦義同入道道才辞世の歌七人永正十五年
七月十五日は討死ゝとの鎌倉管領九代記は見えゝ
金ひらの蓋ゝ蓋はけはゝとゝ
湯川百首題狂歌集はんせの集は寛文十一年五月の比印行ゝ狂歌
八百首建仁寺雑長老明公居士頂戴安井仙岳。如竹猶新。布尚田遠。

平郡實柿ホ刂判の紙は中院せ見れ〳〵今俗は夢は美
ゝなはりゝとゝもる美は貪の正義と紙ゝ
盗人をとゝゝゝれば
られは宗盛が大紙波集小切ゝもあり切ゝもゝとゝは前ゝは
ゝ貞徳の淀河大紙波集第三句は隣の藪の竹はゝられゝと
ゝ自注は筆ゝ人をゝゝゝられば隣のをゝとゝゝゝ筆をゝゝ
ゝゝ世俗のゝゝゝ口順ゝとゝる和ゝゝゝ過ゝ風雅は忘ゝゝのは俗を雅

三 時代不同の歌合

左 日本紀竟宴各分実録 大鳥鶴天皇

望太后大夫藤原朝臣國経

ゝゝゝ

世ほとべに袖ぬらすなれ世の中に寒ぶる民の冬のうるみ

千載抄云　仁徳天皇三年の間みつぐ物をとどめて民の烟の賑へる

ことを悦給ひし　一條院の冬の夜御衣を脱て四海の民を思ひ給ひ

とりわけ冬のうるべうんとて作られ給ふ是又賢主聖主の普く御恵を

黎元黔首ともいふ王は兆民を子とんとも思ひ給ふ今は昔易牧の君は民をしく躰と

なりとは王は兆民を子とんとも思ひ給ふ今は昔易牧の君は民をしく躰と

極撰改りてどうとなひ給ふ亦續古事談に帝王は人をあはれ

み民をめぐみ世のしたんべに寒ぶるをあはれ給ふ　一條院の極寒の夜御衣を

世のけたくかりてなれば上東門院などかいとさとのふぞと問給ふ

日本國の人民さぞらんとあはれ給ふ　惡のことを

なりとて作られる　延喜御門ひさしくさる夜御衣を脱て民の寒

殿うるげいでいのひるとひてうこう曲事なるとなりのをとこ

民の寒を賑ひ御衣を脱て民の寒ぶるを思ひ給ふ御仁慈ひろく

を深くおぼれを浅くと申すべきもいとど世俗の民

を脱給ふ　延喜帝の寒夜の御衣

ぞや愚按ずるに是彼久しく偽あやまりたる歌古事談に

院御字源國盛任越前守其時藤原為時附於女房

獻書其狀云若學寒夜紅淚霑袖除月春朝蒙天衣

云云　天皇覽之敢不差御帳入夜御帳涕泣而來

給ふ　左相府參入知其如此　恩召國盛令進辞書（一本書上有候字）

為時令任越前守國盛家中上下涕泣國盛自受病

及秋難任播磨守猶依此病遂逝去云云　ありとあらを

傳悔ぶ　醍醐院の御ぶんべのようにみや大境寺之八第五巻　延喜の帝の

寒夜に御衣を脱ぎ〻ひ〻ゆえうちうち泣くよし

よみ人しらず

右　古今集又見千伊勢物語赤
大和物語乙巻女郎花物語中巻一

風ふけば波うちうち波うち寄せ山夜まさりひとりねんん

右　大和物語赤見千十朗枝巻十
第七巻女郎花中巻第九巻

よみ人しらず

これもあるひとこと人ともひられ〻今ときそる声をのこすけ
右　古今集に貫之云ある人のうちむ〻大和国のうりる人の山ちか
みある人をこそうりるこの女親もすくなうて家ゆうろく年行ひとりあ
をとこあうちの国に人をあひちりてかれかうよのこすりあれけそ
うれもつくげるるれもえんでやうらへらくどる男のかいとくこは
ゆ年りうれべあ年とおもふてりうたうるとこうりやなとうこひと月乃
廿りうりる夜うちへいくさいのうるよりゝ出てうえられい
妻物くるとうこ琴をうたうこはこの所歌をうたうこはこの所をうみてねみれ

むられをはうくれうりうほうもうこんりうりとうんいひはうるとう
按ずるに萬葉集にうこの沖津ちう波立因山いうちえうん妹がう
ぎうこんむとうあるをとれを題脈いうたうちう波をむうこうねと人のう
ふひ〻ゆどうれいさ〻たうとうんとうこうく女化津白波といひ沖津白波とうん
とうく風ちが〻とひる序歌といてい
本文和物語に云大和の国に男女ありり年月ぐりうゝ〻ひとうこう
たうりうるとうぐちうん女をえうこうり猪もあうこんのうへよれうこうれて
まこむうてをみうこうるあうちうこんうりうとうこうとうへと更ゆうん
れうこうこんの夜の長ひうめをさうこうこうけへ鹿うん鳴うるのうの
ゆこうこうり猪を隔たるをうこと猪ありのやうこうこうとうひうれが行うこう
ちへはこんのうちうのゆうん河ゆうこうとうひうれがをうこうけ
をうこうこうこうれをうこうゆうゆうこうとうひうれがをうこうゆうこうとうひうれ

[illegible]人[illegible]と[illegible]
[illegible]
[illegible]を掩[illegible]と[illegible]二歌[illegible]
[illegible]
[illegible]姫[illegible]僅[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]大和物語[illegible]女郎花物語ホ[illegible]の二歌[illegible]
[illegible]
[illegible]樂[illegible]淫[illegible]哀[illegible]傷[illegible]

㊃ 逃 水

夫木集第廿六雜部八 俊頼朝臣のうた

武蔵野はみなとりかるる逃水のまぢかくとても世をすぐしてる

[illegible]の逃水[illegible]の水[illegible]春の曠野[illegible]
[illegible]れば水の流々[illegible]
[illegible]
[illegible]根[illegible]
[illegible]

性靈集 詠陽燄喻 見下卷十

遥々春日風光動。陽燄紛々曠野乳。舉體空々無所有。狂兒迷渴遂忘歸。遠而似水近無物。走馬流川付處依。運轉註。智論因。飢渴所極見熱氣。野馬飛之為水。疾走趣之轉。迴轉滅。走馬流川皆

遥水のみなとれまく武蔵審うり俊頼の空海のなりとづるとたるうや

㊄ 一二の橋

長角ぐ五之集ろの解ろれ裴向書ろうろく俳諧有流れを往ー

まるも亦勘うべし

ほとゝぎす一二の橋の夜あけりと詠じたるもの

ちぬまの一二の橋を江戸本所なる一ツ目二ツ目の橋なりとなす人あり

なるべしこれ一説なれど其説白い橋をとなへられたる新声寺と

そゞも比名を私にはばかりあらんべうべく本所は昔より一ツ目二ツ目と唱

く一の橋二の橋と呼ばるるなり一説に一二の橋は山城国深草に有

雅一別府志第九巻古跡門下に云月見岡在伏見源平

盛衰記に源軍或説伏見に赴尾山月見岡到法性寺

一ノ橋云山別名跡志巻十二云一橋在東福寺北

門北一町餘伏見街道中央従此南方東福寺境内

九八町内有二橋是其一也云曲亭子云法性寺は東福

寺門前の南西向にあり盛衰記に法性寺の一二の橋とあるもこゝ

なるべしさて其説白い古歌ども

ものゝ法性寺の境内に属せるべしさて其説白い古歌ども

ゆり捨送集に壬生忠見が

いづくにか啼てゆくらんほとゝぎす淀のあたりの夜ぶかなる

と新古今に大江匡房卿の夜船にて京のぼりする人淀のあたり

をすぎ夜物ふかさなりたるも深草の東福寺のほとりなる一二の橋を

渡るとうたはれたるべしさて淀の夜ぶかなる

いはゝ雲のひとつの一声二声聞こゆれば杜鵑も一二の橋を

夜の霧に張弦の餘情なる説をもとゝなべし亦哥にも

いづくにか淀橋あるぞほとゝぎす啼ぞ過ぬる江戸四谷の西の手

淀橋を淀のあたりなるとひとしきりたりとなす

ゆくすゑ水も浅きなるべし

窓殘のうた世をそるゑん雪見くれ

或說よりぐれの比時うろあり六ん窓一ツ五月二百文の課役をあてゝ
世てゝるゆゑりられを窓殘といふ其角がうた世をそるゑん雪見くれと似り
いられとくりとの窓殘のくゆゝろゐねぐ〜さる制度ありといふ〜〜〜えて
所見るゝ〜〜〜その〜ゆゑりとも雪ゑい月ゑんともゆゑ〜〜北窓閉るといへぐ
十月の初て冬ゑ窓を閉て〜隙りる風を厭ふるゝ〜さりていらの裴句
水拙〜按ぜるゝ窓殘い房殘を惜る歌其角が緑草ゑい假字まそヤド
殘と書〜るやをマか惜〜と真名ゑ窓と書〜印行ち〜ゆゑんそれをゝべ
ち〜ゞ後人強〜とのゆゑを註ちんとそ秘音の説をゆゑとゝ」事物
紀一原同。放房銭宋朝一會一要同。大中祥符五年正月。以
雪ノ寒一應店宅務一賃屋一者。免一僦一錢一三日。此雨一雪免一房錢

之始也。七年二月。詔貧民住一官舍一者。上遇一冬一至寒一食免
僦一直一三日。此節日一放免之。始メ也。其角いこの故事をこゝろ〜
雪を詠ぜ〜るゝん房殘い宿殘ゆゝ賃屋い貸店ゆり僦殘僦直とも
任員へ殘のゆゑゝ〜宋の大中祥符五年正月雪のゆゝ〜寒けれをゆく
務賃屋ゆゑ三日の僦殘を免し〜あひ〜とゝ異朝ゑむ〜ゆゝるゆり
そりと今峰ゆ雪をえゝうちゝゝ〜ゝゝ白意めゝゝゝゝり

七夕　五

元禄六年六月廿八日其角が三圍の神社祈雨の裴句い世挙七人のゝる
ところゝ其角が自筆の紀冊三囲稲荷列挙真珠院什物并ゆ五ゑ集ゆも夕立ゝと真
名ゑ書〜ゆゝゝ世の人ゝれをゆ〜ゆゝちゝと續いゆるゝべゝ
ゝゝゝゝゝ因をみゆゝりの神ゆゝゝゝべと續ゝ〜ゝれ続則ゆりゆゝ人ゝれを
難ゝゝ〜ゝゝ之へ一句の題ゝ歌を用ゆゝゝゝゝゝゝと續むゆ僦例ゆ〜ゝ

いにしへ人は五元集にこの禱雨の發句をもるもの三句前に市中句
雨といふ題とおりて
鶯の香に夕ぐれうつる腥しといふ句を載せられ夕立は類なりと
是を用ひて夕ぐれうつると俗語のうつると續けて
ちるぐ禱雨の古歌に天の川のとくちあひぬく小町と歌に苗代水をこそ
ちぐ能因法師歌に旅をうくこそ欲得の手水を禁をおそすくちやと歌に既
にその雨の降るをいふべしあくまで禱雨の義に稱ひ美濃の雲裡が俳諧論
といふものにこの句を評して常に大酒すくちもこの用いくく醜
たりいくく醜くあるに耶も私うく全くそのこころ虚と虚なる故に天稟の趣
句をいくくの天稟の趣意なるべし感應の大雨は降られども晋子は一生この
意をちくざりしも知るべくとのくるは傍若無人の大言といふべし毋りて
こうの句は晋子當座に沈吟若干してうくうん歌そのいうとこの句一

句の玄妙なるいかさまとこれを吟ずるにあらずとの折句なり五穀豊
を祝ひて五七五の上に色とりとりに折なるは奇なりて亦珍なるべし
意のこの句を得るものなるべし其角は實に俳諧の聖なるものなるべ
いにしへ後生元庸の批判にあるに五元集にこの發句雨ふると自注せ
ずこの偶然なるべうん歌早霖は人力のうく致すと呼ばあるべうと王元が論衡
に明雷篇を披閲せばちうんそのこころもれ世にこの句を解せ
るの流則をちくと本歌あるをもらべ金葉集秋用法師の歌に
ちくとの折句なるべうとちくとしてうく毋用の辭をもるべいうとべうに五元集
類拙にあるべうえうる發句の殊に解しがたいものを拔華してこれを注せ
ずとこの句をえしてこれども近ところに予が卒業の志をうくぬ形と物語のこと行
ちくに書肆の請ありてうくに要にしたがひ物語のこと行
あべ暇あるこれ別に草を毋とまべ！

八 句の花 折端

俳諧の附合に名殘の裏の花を句の花とも何の好ことの名あることを
考へ出し総角の比俳諧師はこれを向へ入替へ一生の連歌名
殘の裏の花前に至れば宗匠迄多く句の花と博
ふ人ありて沿革ひとしく人毎に名称の花に一巻の大意を
ちりて未練の俳者小附句を針とこの花一句をとりて裝句
の撥に句の花とつくと答へられしかば殺しとのことを
疑へ年長に尋ねしもうけがたき殺しとのことを
龍満尾の長なるべし静斎老人随筆に句に韻の者文なり韻因字
ふて韻をいふにほんと訓ちに句に韻の字をほんを
繞ぐる程なり古人訓釋に句を用ひ推量られて感ぜとなり
とりて毋り小連歌の附合長短百句に満るを百韻とも韻をつるひと

訓をとりて名殘の花とも月あるゆえその韻満尾の花とも呼べ
て句の花といふ人もあり解して人もあり殺示ちが今按ず
るに月花の殺に眺るり物の尾に至て海のづりに畫るを句とも篇名
の殺小殺の威を句ひとしいふ殺ば裏物などの意に初のほどに多く気と
しいふ殺て未に至る程なのにとその香うとてりて多く気消えるなり
威色の白ひもとの意に竹色にもそも紬草摺の上の方に濃そ付より淡き
に薄くなりて果に白色に成行句とも力の殺なるも句とも多なり
亦婦人の眉をつるに黛の薄く殺る花を句とも小とのりいづれも石の
意に名つくるとなんなれば句の花もとの殺に因て解とべ一巻の花
とに果るをとりて小ほひとりなりの

○亦俳諧の附合に裏表のをとりの短句を折端とも何人もの異なり
なるにもとも禄以おうの名月に人あるべくべを名の短句を端

とゝ〳〵ゆ落着たゞゝれ名月より字書よみ端ハ首ゐりとゝり正月を端午と
○ゝれ初の正月を端午とゝひ事のたゞめを蔑端とゝの和訓ゝとゝたゞめのハ紙
異ゝとゝゝし紙のゝゝ〳〵べゝゝゝ〳〵ゝゝどゝのゝゝもゝる端ゝゝ紙のゝゝめゝゝ
べゝゝゝめゝゝゝれが折端とゝゝゝゝれゝ折のゝゝめゝ今ゝの裏ゝゝの長ゝみ
ゝを折ゝゝゝゝ唱ゝべゝれ當初穿鑿足ゝゝゝゝ似ゝゝ
周ゝゝゝ俳諧四季の紙ゝゝの中正月の部ゝ三ッ物貢ゝゝゝゝのをゝゝ
ゝゝ予曩ゝ俳諧歳時記を編輯ゝゝゝゝれを削去ゝゝゝゝゝゝゝ
予が意ゝを猜ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ旁ゝゝゝゝゝゝ舊ゝ傚ゝゝゝゝれを載ゝゝゝゝ三ッ物ゝゝ蔑ゝ脇ゝ
三ゝゝゝゝ正月の部ゝ入ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

を　天朝の名月多り俳諧狂歌い廣山の名月多り畏邦の名月を
こゝろぶ古今集ユ謙諧（謙俳音通）歌とゝなれ〳〵を行とゝいへんもとゝ
事曲歌を狂歌とゝいへんも憚ふべからざるあゝ
○ある人予ニ問今の俳歌者流相共ニ先生と稱ス大人と稱を共ニ先生と
大人ニ優ル乎ゝ曰つの稱呼その中ニ乎ゝ問へとゝ予ニ答ていはく
いらく書言故事ニ稱年長曰ニ先生韋昭辯名古者稱
師曰ニ先生とゝ云ゝ論語憲問篇闕黨童子將命或問
之曰。益者與。子曰。吾見其居於位也。見其與先生並
行也。非求益者也。欲速成者也。孔先生その師を問ふ子
罕篇。子曰。後生可畏焉知來者之不如今也。四十五
十而無聞焉斯亦不足畏也已。後生少年をゝ四十五十
なるの年既ニ長ズ所謂先生なるものなり。亦大人ハ書言故事ニ子稱

ゝ曰大人。僕霍光。霍去病弟也。父中孺平陽人以縣
吏給事平陽侯曹壽家。與侍者衛少兒私通吏畢歸
娶婦生光。問絶不相聞。不知少兒已生去病後去病
為驃騎將軍擊匈奴至平陽傳舍遣使迎中孺。跪曰。
去病不早自知為大人遺體云。ゝゝべ漢の時既ニ父を稱
ゝゝ大人とゝゝ亦孟子ゝ大人ハ德盛ゝて文明なるものとゝ孟子
盡心篇。孟子曰。有大人者正己而物正者也。朱子註。
大人德盛而上下化之。所謂見龍在田天下文明者。
亦驃文云篇。有小人之事。有大人之事。且一人之身
而百工之所為備云云。此ふも君子と大人とゝ漢の時商山の隱士角
角里先生と稱諸葛亮南陽ユ畊ゝとゝ梁父吟をゝとゝ臥龍先
生と自稱ゝゝ個大人ユ毋ゝゝゝゝ良稱ゝるものを勿ゝゝまゝ

大人の稱呼先生ゑ優ゑると遠く亦按ずるゑ皇統紹運録ゑ武内宿禰の孫平群真鳥のゑゑ紀大人とりゑ人ゑえたり亦平治物語源平盛衰記亦帯刀先生義賢ゑり併られらい名と職ゑ喝るのゑとゑゑゑ大人ゑ生と同じくゑゑ大人をゆうと続ゑゑ日本紀ゑゑえたゑ

○捜神記云舊說太古之時有大人遠征家無餘人唯有一女牡馬一匹女親幾之亦是大人謂有威雅者也見于卷十四

(十)殆歌 古凶立報之徴

賢者之言曰禍福將至善必先知之不善必先知之故至誠如神信哉汝言也氣之動物物之感人搖蕩性情形諸舞詠照燭三才暉麗萬有靈祇待之以致響逸禍福不招而來謂之天吉凶不求而得謂之命

或謂吉凶前定或謂禍福無門夫命運非人所能也而人能致之致之未悟亦遲乎

○本事詩曰劉希夷嘗為游詩曰今年花落顏色改明年花開復誰在忽然悟曰甚不祥欲復遘思逾時又曰年年歲歲花相似歲歲年年人不同又悪之或解之曰何必甚然遂留之果以來春之初下世

○崔曙進士作明堂殊詩贖帳曰夜來雙月滿曙後一星孤時以為警句及來年曙卒一女名星星人始

歳をゑゑむとゑゑゑ

むかし定家卿さうぶの井をうるものとなる物語
宗尊と中作りしに後嵯峨院のみとよりかなるうの物語
作りこのさまあれとも先の為朝郷をめしされうけるとて
法身のうへまさる紀世のうれひ出来りちひられあへざり
かのぶ紀てうこゝあへるとあり

こゝとのうらひられしむりしかく今はねたのあるう世の中

ちれは東方朔ぐとこゝか用之則為荒不用則為鼠とのこゝろ
なるべしやとよ人はこゝたのをゝをもらくたりなべたるくとよ世はこのひ
もべたるよとを異本女郎花物語 亦一説に宗尊親王百首の歌をあとゝと
為朝をよ判せしかしあひしよこの荒とのこゝ云の歌をいくしかりしこゝ
くは身のうへ危うべしと練中ちうされしの果しくまさうれ世の慈心
ものくうらみも世しかりさうなるとのこゝ

○光厳院の正慶二年春二月のころ東軍よ敵破の城を攻うねく後
醍醐ようんさりしうが寄まの陣中ま連歌を興行したりる幾日長崎
九郎左衛門尉師宗「さそうけてかうさんせよ山桜とせをを立藤沢兵
左衛門尉「嵐や花のうちたるうくんとをうたれを関人孔雀引
うの軍ちうしうじ嵐をうちて敵を味方ふるとうしうる
不吉なりと云ひ果しくその軍利あうと大軍ちうぐふ引退くのこゝ
ちうく是年五月廿二日よりうく高時入道孫舎ろ滅亡せり

○近世松崎蘭如といふ人の大腹とうの題い腹と服と通ぜるうて俳諧の
歳旦ふい忌べたるとある人ひとりるる太腹と服るとも何の綱あるんとて
大ふるやこうちあうど寿福孫と嘆ちしこの年歳孫の慈ふ
・服をうるとこ度うりとひ伝へたり

○平が物のうろ世ばえるくい安永九年の歳旦ふ俳諧仲葵足ぶ

何の式かの式りなく宿の春と咏だらびられを世く人凡彈しとそ
墓〜紀整なしうゝ世てさきどらいぬ隱者なりともこの世なあゝんのれ
物の式なりゝどやいと織たりゝの果〜くその年月なりぬ

⑤ 亦天明の年間俳諧師存義が歳旦の發句

信濃なる俄黃布まやゝ男と咏どりをある人難ゝて淘芝布ま
る幽服なりこの句に紀發りなると嗤くゝ移くよりの年存義いむるくなりぬ

○亦天明五年俳諧師夢方が歳暮の發句

これえても賣丑ね石あり年のられと咏どく次の年月まりりる丑

門人某甲ゝこのなを物くりゝゝコるが師去年の暮賣丑ね石ありと咏だん
今茲墓碑を建る前象なりとなりこの二人い母ゝ稀古る爲ども
うれいをゝくもゝゝね齡なるべしこのゝい嫌忘よゝぼゝひゝく鶴亀のめゝ
ゝ紙ひるゝゝべんもをりゝうれど假初ゝひ捨なる歌連歌も嗤とゝ

あとをとることなりなり去永乙未の春ゝのうゝ兵法發會の日ハノ
とりゝとを向の丑七丑のをりゝなるれくゝあゝ亦めゝゝゝゝ老の梅
とゝ今のひけるゝこの年弘生の末の六月ゝゝもくゝ失怙の憂あり
亦寛政十年の八月八日氣ゝん病中のゝよゝ秋風や雅をまゝりの
家の雲。とゝはゝくゝれいこの雲ゝ杖や春のけゝの家ゝ年。と作ちと一財
の藝向ゝ家の塚ともゝゝたりと向れゝゝゝ子雲とりの字ゝを心と家の陰といんを
ゝ系ひゝくゝたるべゝれとひゝくゝ作りたるゝゝの句ゝ辭世とりゝゝれゝ母ゝ
人間一生を五十年とゝゝて十五歳ゝゝ義路をたる如ゝ殘ゝて三丑年なれど
夜ハ月ゝ人事を見ゝどゝれを畳疫ゝ列るゝれ僅ゝ十七八年なる
ゝ限ある命をゝく一日半時もゝゝゝゝ過さんいゝをゝりるべゝゝゝ
どゝ且食ゝ和の米ゝゝゝもゝゝゝど生ゝゝゝゝ十五歳ゝゝ一日の食を
白米三合とゝゝ拾六石二斗十六歳ゝり五十歳ゝゝ一日の食白米

五合とうんて六拾三石七統計七拾九石弐斗ちれを三斗五升俵にすれば
弐百廿六俵壹斗ありべし　縱　六十ちまで生るとも三百俵の米に過ぎ難し
晉の陶潛が五斗米のために腰を折めでとなる隱逸に倣ひ
うたの米飯食んとて小利を貪ること物あらそひ人に物備ともその期
に後るゝまじ衣食に奢ると活業に懈るとの油斷よりなるべしさり
とて食に所の米にてもあるべしとも稼ぐ時辛苦して耘耕せしめの
ちに飯に妻坐して飽ちて食ひすぐもの世のが天稟の福のさふあ
らんこそ有ぐこれ　聖代に生れあひ年久しきの嗚る日ともすれ
ば峯のちげたのものも孫る隈なく　惠ちのひとみなの川の末まで
も潤ひ渇らぐ道に遺たる物拾とて疾もて鎖ちぐとの和漢の
ものへうもちてこれを仰ぐべし高しとても忘れぐとて身の
ほどをを勉るべ二百廿六俵の米を沐んぬ者なぐうまて耕ちぐどん

唐山の常言に曰く食ぐ山も空しといふ泰平の民に安れよるべこと
労に沿渡ぐ思るとをちぐる所ぞその志富ぬの稀なりしに貧家の
ことの八十めまりあるに幸ひに徒れ義あり月毎日に烟をう拜えて
天下泰平とのこ禱ぐうぐろれとうぐうあぐ笑ひて嗚呼ある義ちあ
るる安事に物ぐらに身にもあるこぐ世のぶ孫咒の福に敢ぐ天下泰平と
のこ禱ることろ沐れどひ〳〵ぐ義ぐらべ〳〵されぐとよりれいと祿慶
長のころを壯年とにるとれい夫面にたちあるに時に自分のわをうい滑
皇辛ぐに生延ぐ〳〵ゆ〳〵長閑れまにあひりいと安らふぐも孫ぐも
を難ぐうちに代万代の後ぐもぐ〳〵ゆ〳〵ことあるちぐ〳〵とうのあるたえと
願〳〵れるるに〳〵ぐ〳〵〳〵ぐ虎に逐ぐるりの画る虎をうえて〳〵〳〵
世それとりとにる牧羊もこの義が教るべし

二百廿六俵の米にて〳〵ぐ〳〵ぐ人米濱に妻女を様ちるとうれ

高何石何文と書この高ハ高中の義なれども孟子ハ五穀多寡同
則賈相若。とうえうこう高の訓と寡の音と近ければこゝを
備りて高と書欤孟子の寡ハ寡よみらべし

十 鬼神論

鬼ハ大陽の精ゝ故よりれをうるゆゑんとのあるべし
りの鬼神ハ陰陽の義なりと王充論衡より亦史記黄帝の本紀の
注ハ死而不亡。謂之神。死而不祀。謂之鬼。とうえうこう愚按
ものゝ神ハ伸なり鬼ハ気なり人の伸気ハ敷ゆ鬼神亦敷ゆ人の伸
気ハ〻眼目の視るゆゑ鬼神のえがたれをもゝ考べし
王充ハ人死ゝ鬼とこのゝ古来今往死ものの幾億万人世間鬼ハ
若ハ遠ゆゝんとハいまこの論ハもゝ盡さゞる歟人死ゝてその魂魄
ハもゝ敷ざる間ハ寛鬼とゆりて人の眼ハえやるともあるべし我俗これを

幽昊とハのれをうるとれ雲霧の如ゝ雲と霧とハ天地の気ゝ天地ノ
気ゆる故ハ形ゆゝその形ゆゝとハのれども繋るとれハ人これをうるゆゑと
ハのれども敷ざるとれハ絶ゝ跡ゆゝ気息ハ人倫鳥獣の呼吸ゆゝ出ゝ
呼吸ゆる故ハ形ゆゝ形ゆゝとハのれども天寒ゝれ朝ハ人これをうるゆゑと
ハのれども随ゝ滅と寛鬼の人ゆゝうるもその魂魄ハもゝ敷ざるあらひ
あるべし其人死ゝと鞍の耳を拔たれハ魂魄既ハ散滅と寛魄散滅ゝて寛鬼
とゆゝらんと欲するともゝらんや肯是狐狸の妖怪のこれをうる
ものの狐狸なるをもゝ寛鬼とハのれ知らざるもの
逐ひて塩尻云。玉笑零音云。人之初生以七月為魄。人
之初死以七月為忌。一魄而一魄成。故七七四十九。
月而七魄具矣。一忌而一魄散。故七七四十九月而
七魄散矣。故知鬼神之情状。とハのれハ亡者の追薦ハ十

九月まで〳〵止りの日七魄散ずるが故なり散じて後亦聚ることなし蟄べ春の
氷の解るがごとくその解んとするときはまづ碎けて水上に浮ぶものの人死
もまづその魂魄のまづ散ずるが如く氷解て水に帰し魄散じ
魂は帰を寛鬼に碎る氷の水上に浮の類なれば鬼神も滅するなり
あり寛鬼の説延ずるまづ今をむかし何ぐの院の一僧秪庵に寄て
帰りたる易経を購ひて考に吟りて投閣するに朱をかくること
註もその説一つもとるべきなし僧学を掘て大なるあざけ笑ふ於てその
疾俄頃に発熱頭痛して病を五六日保て死んと又某の汚に儒者
あり一夕その門人某生忽然として来れて儒生これをうけて
怪しまざるなかれる月黄泉の客となりたるあるべき中と問べ門人
もとりあつかりまづ今何の故あるかあらんと研究門人
うち微笑して易経註をうけて数年苦学したるあるべき生
ありこと生死後の日もあるまづ妻のうるまんあること
所易の書籍を賣りて易の年来まのれぜしのうれがいこと
一日ひ寄るに某の院の僧秪庵に寄て彼易経を購ひて説
とうべきなりとあざけ笑ふが僧なるべ矢庭に渠が頭を打て懲らしめる
五六日に及ぶまで彼僧今二日ばかりあるべきと死とべし生
今に托して責傷が病牀を訪ひ面あるいはまづ打懲らしめるとなん
おのづからとのに儒生中もとして呆然と且はしばらくまう憤ひれど彼
僧はまと原来怨なるべきの言の妄稚なるを怒てこれを殺さべ石に
うつて身を殺して化をうべきもまがごとはあるまじきまる
ちまちとして諭すべ門人えざして沈吟して生生の言固なるべきもまん今
その處を失へをとをうべ放ちまうしとして儒生みらくらくあらべ彼まる
墳墓を建立してあるとべ其処に處うとのべけるとこと

ほくの死沒したまうことをうけたまわりて儒生八次の日彼寺に至りて絆の
題を告げよければ僧はなく怒りて怖ぢおそれその人の墓碑を近辺につと
叮嚀に経をどとる程に病ませ苦しうて後遂に禍ひとなりぬる
怪談よりもなほ更に例の俗を物語りうるあらんかぎりまことをもむかし
てこうりくまども物くりあるうの異妻に相則をとりたのびくしまふひふ
うれば嫡妻これをねたみとりふ程にむさくれまでよりも夫の生る隙ふたぐ
出ぬるをを刺ところ二ヵ所るをを刺んとすると夫の母外面へ走り来
ることの景迹をえて大に怒り夫庭に小児をくれ抱れて又外面へ走り去
りぬれば母ぐ婦は忽に自殺して失ひたるとしるべ夫も母のが陽を
悔て妻の狂乱を哀み後のひとり程ほどに稚児を一雞ふ
ありしが辰こるべの親族のうち遣りて絆の母ちあるをぐともかくもして
雞育てあられと頼み聞ゆるに推辭りて家に女あるとどうぐ嫁らど

孫とふのうりしぶ近隣に小児あるりく乳汁をもつて両三日飲ろ
に彼親族の女たれに浴室ゆるとく途に彼稚児の母にあひぬ怪
母りひて〜ぬをもゆいえで足ぐやに泣るをとやとぬひとぶ児の養
育浅ふぶるをとろこびはえちぐ母が體を貸ぐ〜ぬれとて
ぐ怪〜死に限をうれど母をろ〜とるもの〜ぬと泣ひて家に去て
ゆり〜ぶその夜俄頃よりちぶつと次の日も起ぐ殊に怪れい彼稚
児が啼泣ぐに病人られを抱れあげて乳を含るに處女なれど乳汁
やはりんとろうぐに吸て飽とあるが如〜ぬとの児を嫌〜なぐすると
い声音も面紙もその母に似ぐり亦稚児のうく眠をたる時のごとく忘れ
たるが如〜と物のひざ母も舊の如〜怪〜れるうふぐもの〜ねばその児
の父も絆の題を告ちし追薦の仏事を叮嚀にとり行ひ乳母を
て彼児を雞育ちぐ女の病ひも遂に母とり後にとえて怪〜とろ

ゆもとりしとどめる人むう〜月経ちてとそ三年ゝ相和うり況亦
いぶれのかん時いぶれの里の中忘れよ声て市人の妻ちぢめて子を生りるが
産後遂よ沼肥ちどして〜分まりねその死んとそとそとのるまい
乳母して家くのく雑育しゆへ里親ちどいひりのるる托遣〜ゆひそと
遺言ちうりれど原来富るもあるねば乳母を雑んちうゆて里子と
いりのよ遣ちれよ一宿成程て里親その児を送りこ〜けをゆ〜を
と三度よなびしりと怪とにひて〜いるるあよるみるをこ〜ゆのゆと
図よ里親答くこの児食いらく稀りれど依て通霄泣て暁よ及べ
そその啼とれ雑といちちど外面よ女の声して児の名をほびそべるし
ゆい怪しれるのある亦ふくしまゆちそることとりしのべ又い怒り
泣りて〜ふく悲ちれうり人の乳をのらひにてその児を貰るよ怪しと
ちんゆりしとどこいるる子ぶ親くきちゆるとろみして一事も又を防

ちんゆれば世よ究鬼因先のひぐとし我い書籍を愛惜して或いとのるよ愛
着して〜魂魄のちぐ散滅ちべ人ち解て声と形とあるが如〜ちりとも
魂魄久〜凝滞ちるゆちらべとそりて〜後遂よ怪ちす寛鬼を臨
終の餘煙ゆりちぐりりあて〜寛鬼とるるのよゆ〜べ王充ち論よ鬼い
人死して〜るるのよゆ〜べとりゆも不可ゆ仏者の説よ鬼い人死して〜るるゆ
べとりゆも不可ゆり鬼神よ二つゆり天地よゆりとい陰陽とりゆ萬物よられ
て死生とりゆ人死して〜その気散ざるを寛鬼とりひ陰陽凝滞して順な
らざるを疫鬼とりゆ孔子曰。鬼神之為德。其盛矣乎。視之
而弗見。聽之而弗聞。體物而不可遺。使天下之人齊
明盛服以承祭祀。洋〜乎如在其上。如在其左右。詩
云。神之格思。不可度思。矧可射思。朱註程子曰。鬼神、
天地之功用。而造化之迹也。張子曰。鬼神者二気良

能也。朱子謂。以二一気一言則鬼者陰之霊也。神者陽之
霊也。以二一気一言則至而伸者為神。反而帰者為鬼。其
実一物而已。亦曰。鬼神無形與聲。然物之終始莫非
陰陽合散之所為。是其為物之體而物之所不能遺
也。とのつり聖人鬼神の徳を称して其の上に在が如く其左右に在が如しと
実にその上にありその左右に在るべしこれを祭祀とゝに在が如し人
の寛鬼疫鬼をつるも亦如くその如くその気に觸るゝとゝに眼前に在ぶ
如し水火に原れるゝ所れども人火の然泉の流るゝをつる風雷も亦
敢るゝ所れども人凡烈雷鳴をつるとゝその声を聞寛鬼の説延べゝ
仏説にこれを人善なれば天堂に生じ悪なれば地獄に墮るのゝこれ
を餓鬼とゝの和名鈔云。孫愐云。餓鬼也。餓五箇反前
與ノ飢同。久飢也。内典云。餓鬼和名加岐其喉如針不得飲水。
見水則変成火。とのつり飢渇人の憎む所をつて餓鬼とのゝ欲
悪ゝの気の主ゝとゝ善ゝを神ゝ悪ゝを鬼ゝ亦これ故ゝ俱
舎論頌に鬼以尽為日。以五百人間一月為一日。而壽
五百歳。とのゝ蛇足の辨ゝその妄ゝ甚し。雲霧風
雷水火鬼神ゝ画者悉これを画ゝるゝ雲霧風雷水火ゝその形
ゝ所ゝを知ゝるゝをつて妄ゝとゝ鬼神に至ゝて妄ゝとゝ実にその
形ゝとゝ掛ゝつゝ左平記の載
ゝのゝつゝ金鬼風鬼水鬼隱形鬼ゝとゝの四ゝの鬼を使ひゝ好賀好
婆の両國これゝ妨られゝ王化に頂ゝのゝ憂に紀朝雄ゝとゝの
りの宣旨を蒙ゝて彼國に参ゝ一首の歌を詠ゝ鬼中へ送ゝ
歌　草も木も我大君の國なれば いづくゝ鬼の栖なるべき四ゝの鬼ゝの歌
をつゝ忽ゝ消ゝ去ゝ失ゝ千方勢を失ひゝ聽ゝ朝雄

亦討られしとかつて是その鬼とかつての狐狸欲狐の燃と共を鬼共と
いへば狐狸の假鬼なり亦鬼共い気共なるべしれが息の夜つりのるるの
なれば共なるべし共を鬼共といへの歌或い坂上田村麿勅を奉て鈴鹿
山の鬼を討とかいへり妻なるべし叙の巻に亦云美田源次綱頼光乃
宝の吳剣を帯て疾一條大宮へ使に反橋に干て鬼のまを切とる
なるべく頼光その剣を鬼切と名ばくとかの或い反橋を羅城門に
ひきとんせるかの所部晴明識神を使役し後その鬼を一條反橋の
上に封じ源頼光朝臣勅を奉て大江山に悪鬼を討亦の説あり夫
鬼神い形なの形なるべれば何をか討何をか斬何を役ぜん鬼と人と
同じかるべ縦透歌を就てこれに賜とも解とべ死者俗人まら詩
歌を志らば鬼も亦決て詩歌を感ずるとかいべくこれを感ず
るものい悪鬼なるべ悪鬼なるべ人民を殘害なるべ　詩品

云。微藉之以昭告。動天地感鬼神莫近於詩賈之序
亦云ちからをもいれずして猛を和らかせをとと女のあらをもあらぶるかの物のを
をもあらぐさしるるものい歌なり云られ詩歌の徳を美もるへ中その實に
過ぎり天い左旋と日月い右旋とかつての理のそなへ動くや動ず
るべ人のこれをうんとも歌なるべ人い地上に立をりてたるべその地震
をもるもられども人なくこれを動もるべ天地い固に動そなるらどいら
ぐの鬼神を感ぜんかの詩歌をりて天地を動て鬼神を感ず
しるるなるべ葉公が真龍を憎むなるべ世人なるべ佳句秀歌を
憎まん曩なるべ人なくいなるべ　歌ならいはまてそなられ天地のう
ごんぐなくなるものい千古の人り世なるべ賈之なるべ
絶倒なべ亦彼頼光朝臣綱に命じて羅城門に建る所の榜示今

勧善懲悪
仮名読
教訓
草子

京
山東京傳
作
歌川豊国
画

京師なる某の家とものの手近くものの撥を摸したる墨本一
幅をかくりにくくとれをもて聞もるを疑ひる汝よりもあくどその撥手折
くその文全くくずれども変化退治の告文をいと不審右の墓録也
往昔の妖賊を鬼とも変化ともいくるべく世俗ものを真の鬼
なるとものいたづら物の醜悪強大なるものをもて鬼とのみ
本邦の古實狹草花の鬼百合鬼薊あり酒煙草蕃椒の鬼ころ〻の
名あり馬の鬼鹿もあり剣の鬼切鬼丸あり軍書の鬼神と呼ぶたる某生
を討とり好と軍陣の用務をなる処あるをなんとも朝雄頻光の退治〻めく
い真の鬼のあくざるを知らん鬼切鬼丸の剣も亦たるべ鬼を切くめ〻名
付たるものあ〻ど鬼百合鬼薊の如く後人附會の説をなと
のを羅生門の拾坡拔の羅城門の垣基半二尺大行七尺溝廣一丈東西南北狐鬼めくのどく注
ちり今人い羅生門と書くくられをちちりんと読いろ〻ちのちのんと

喝べたるく小世強物語字治拾遺物語ホ　栢原の御時ちのちいの
高沢をさらせらくとありらせりんい僻読るべくされど兼好が徒然
草に載たりし伊勢國の鬼のくの當時のくられをいのを眼前にくるも
のいのくとぞめくと鬼とのいのべ亦ぞるを神代紀に大神軻遇突智
の生るくに至くて甚毋伊弉冊尊焦とくて化去めのくく伊弉諾ぞる
黄泉に入ことくて共に結ぬいに膿沸虫流くをくて急に走くて迴こと
あの時伊弉冊尊恨くて泉津醜女八人を遣くて追留んとぬのと
ありとれ陰陽相別るくの義欲醜女い鬼女なり今世に大鉾の御小鬼
面あるものをちくを大鉾とのいちくいい醜ガしみとめと通じ日本紀の
説伊弉冊尊を陰とくて伊弉諾ぞを陽とくて又伊弉冊ぞを鬼とくて
弉諾尊を神ととくに冊のくくいとくて信ズ鬼神い陰陽死生の義さ
○頼之の四天王ホかゆい古今著聞集今昔物語ホいんこたれど平

季武平公時平貞道又村岡五郎平貞通 亦今昔物語ニ村岡五郎平良文これハ列人なるべし と
のりと部臼井酒田などゝ稱るものハさらなり綱がるものもなんどゝ所太平
記とゝのゝのいうけられぬ説のこゝ毋ほゝ至ものゝ遠曾文人墨客
動をれが彼書を引用しゝ故事を論ずるものゝこゝろ得がゝ

○鬼とゝのゝ字ハ人の名とをべくもあらず孫呉もゝ唐山戰國の時鬼谷子
のり亦義経記ハ鬼一法眼ありとれも紀一なるべゝと但徐福のゝ録
のゝろ伊丹の俳諧師ハ鬼貫とゝふゝのあり呉のゝそのゝ義をゝべ

○今東北の隅を鬼門とゝのゝ風俗通ハ東海度朔山ハ有大桃樹。其北
有鬼門神荼鬱壘ニ神守之。主領萬鬼。とゝふゝ故ゝ桃芽桃
板も唐山の俗兒ゝゝん狡鬼ゝのゝ黄帝宅経ハゝえたり其説
陽宅陰宅無魂五虚四實ホの月あり高廉が相宅要説ハゝゝ
葛孫の上葛孫を添ハ昔人既ハ宅相を信ぜど東家の西ハ西家

東とゝとゝりゝの一句ゝゝその義ゝのゝを論ずるハらん

○黄ハ美女をゝゝと鬼とゝひゝり拾遺集ハ平兼盛〳〵みちのくのゝゝ
系の黒髪ハ鬼ゝりれゝとゝのゝゝゝとゝゝと鄰ゝハ見ゝゝ外面如菩薩内
心如夜叉の義ゝるべゝゝれば究竟を鬼とゝひゝんも準ずるべゝ

特歌吉凶追考

壬生忠岑宣旨ハゝゝと春の歌ゝりゝゝゝゝ雲のゝりゝゝゝ
ゝゝを弱恒ゝゝハ難ゝゝゝゝゝゝゝゝ世の中ゝゝゝゝ 十訓抄巻二ホ見ニ
巻ホニ ゝゝゝ類ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 嬉ヲ抄後撰集